

学生の保育実習への不安に関する検討Ⅱ —実習経験から保育内容「人間関係」の講義へつなぎ不安の解消をめざす—

安東 綾子・矢野 洋子

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2021年10月29日受付、2021年12月6日受理)

要 旨

本研究では、実習前の不安・実習中の困り、特に保育内容「人間関係」にかかわる不安と困りについて明らかにし、実習指導と科目間の連携や、実習の学びを講義で生かす方法について、保育内容「人間関係」の講義を中心に検討を行った。その結果、実習前の不安は、実習内容にかかわる保育実技に関わるものが多い。しかし、子どもの対応にかかわる内容は、実習前から実習中にかけて変化は見られず、不安や困りが継続し、解決も難しいことがわかった。また、保育者との人間関係にも不安や困りを感じており、保育者によつての指導の仕方の違いや対応の違いへの戸惑いが見られた。学生の不安や困りから、実習や実習指導を中心にとどの科目でどのような内容を指導するのか、指導内容をどのように科目間で連携するのかを明確にしなければ、実習の学びを講義に生かすことは難しいことが明らかになった。このことから、保育内容「人間関係」の講義では指導法に関わる実技、様々な人間関係の取扱いとその対応、「気になる子ども」の人間関係から「障がい児保育」との科目間連携を視野に入れ、シラバスの作成、実習の学びの活用としてエピソード記録の活用方法が課題として挙げられた。

キーワード：保育実習Ⅰ 保育実習Ⅱ 保育内容「人間関係」 科目間連携

1. はじめに

1. 学生が抱える現状

河内・小島(2015)は、教員や保育者を目指す学生の約6割が新しい人間関係を構築することに不得意さを感じていると示しており、人間関係の構築力の低下が考えられる¹⁾。また、加藤・安藤(2019)では、幼稚園教諭・保育士の早期離職の理由に園内の人間関係の悩みを多く抱えていることから、大学生の人間関係力の育成に関する研究の動向を調べ、保育者養成への活用について検討を行っている²⁾。それによると、保育者養成の学生を対象にしている取り組みのアプローチは様々で、直接体験機会を確保したり、オペレッタ制作、音楽劇、保育内容「人間関係」講義内での自己開示・ロールプレイ・エコマップの作成が行われたりしており、特定の授業だけでなく、科目間、教員間での連携がみられ、どのような授業においても人間関係力の育成につながる教育の展開は可能であると示唆している²⁾。このような研究が行われることから、養成校は、保育者をめざす学生が、コミュニケーション能力の低さや、人間関係の構築力の低下を感じ苦慮していることが伺える。

学力面では、文章が書けない、基本的な漢字が使用できない、誤字が多い、メモが取れないなどが挙げられる。これらは、実習巡回指導で指摘がなされたり、評価表の所見の部分に記載がなされていたりすることがある。佐藤(2020)は、実習日誌の問題点を注意力の欠如、敬語や言葉づかいの変化について示し、年々問題になっていることを指摘している³⁾。

2. 学生の保育実習への不安と不安解消にむけての実習・実習指導・講義のつながり

保育士養成の短期大学に在籍する学生において、初めての实習に対して強い不安を抱いている。保育士を目指し学生が抱える課題と変化について、テキストマイニングによる研究の整理を行った館山ら(2019)によると、近年になり学生の実習に対する不安について検討する論文が増加傾向にあることが示されており⁴⁾、いずれの養成校の学生も実習を不安に感じ、その不安の解消にむけて取り組みがなされているところだと考えられる。筆者らは、実習指導において、学生の実習に対する不安が強いという印象を受けていた。そこで学生の様相の変化に伴い、実習に向けての初年次教育の取り組みの工夫を行い新たなカリキュラムの構

築(安東・矢野2021)と実習の学びを活かすための取り組みについて検討を行ってきた⁵⁾。実習の学びを活かす取り組みの一つとして、鯨岡が提唱するエピソード記録を活用し、2017年度より各種実習のまとめに必ずエピソード記録を位置づけ、事後指導でそれらのエピソード記録から悩みや疑問を解消につながるよう事例検討を取り入れようと考え、取り組みをはじめた。その後、保育士養成や幼稚園教諭養成課程の学生の実習後のエピソード記録の内容について分析(安東・矢野2018)を行ったところ、筆者らの担当科目に関連する「気になる子ども」に関することや、「子ども同士のトラブル」に関するエピソードの割合が高いことが明らかとなった⁶⁾。しかし、あくまでも学生のエピソードから推測されることで、実習の不安や困りをより明確化することで、学生の不安や困りを解消させていくことができるのではないかと考える。

3. 保育実習の不安から保育内容「人間関係」の講義へのつなぎ

保育士養成に大きく関わるところで、平成30年度に保育所保育指針の改定が行われている。今回の改訂では、0・1・2歳児の利用者の増加に伴い、3歳未満児の保育に関する記載の充実が図られ、加えて、保育所保育における幼児教育の積極的な位置づけとして、幼児教育の充実を図られた⁷⁾。3歳未満児の保育内容「人間関係」の内容の取扱いには、①保育士等との信頼関係に支えられて生活を確立するとともに、自分で何かをしようとする気持ちが旺盛になる時期であることを鑑み、そのような子どもの気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに、応答的に関わり、適切な援助を行うようにすること。②思い通りにいかない場合等の子どもの不安定な感情の表出については、保育士等が受容的に受け止めるとともに、そうした気持ちから立ち直る経験や感情をコントロールすることへの気づき等につなげていけるように援助すること。③この時期は自己と他者との違いの認識がまだ十分でないことから、子どもの自我の育ちを見守るとともに、保育士等が仲立ちとなって、自分の気持ちを相手に伝えることや相手の気持ちに気づくことの大切さなど、友達の気持ちや友達との関わり方を丁寧に伝えていくこと。⁸⁾となっている。特に②と③は、人間関係を築く上で大変重要な援助を行う必要があることを示し、高度な保育能力が求められる。

つぎに、平成28年度、幼稚園教諭養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究がおこなわれ、モデルカリキュラムの作成に当たっては、5領域の教育内容の指導において、幼児の実態に則して総合的に指導できる幼稚園教諭を養成する観点が重視されている。幼児期の教育は、生涯にわたる人間関係性の基礎を培うことから、いかにして質の高い幼児教育を展開・充実させるかは、子どもの人格形成を目指す学校教育の重要な課題であるとし、新しい幼稚園教育要領の趣旨を踏まえ、5領域の教育内容を着実に実践していくためのモデルカリキュラムが提示された⁹⁾。

保育内容「人間関係」の指導法では、全体目標として、「領域「人間関係」のねらい及び内容について背景となる専門領域と関連させて理解を深め、幼児の発達に即して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定し保育を構想し実践する方法を身に付ける」とある⁹⁾。

工藤(2016)は、保育内容「人間関係」の授業の中で、幼稚園実習中の人間関係の事例から子どもを理解し、それを基にした指導計画の作成についてグループ討議を実施している¹⁰⁾。その際持ってきた事例の多くは、子どもの年齢に関わらず、いざこざなど子ども同士が関わることによるトラブル場面であり、トラブルに対してどう援助すればよいか悩む記述が多かったとあり、トラブルの対処に関しては、学生にとって難しいと想定された¹⁰⁾。そこで、筆者らは、エピソード記録の分析で得られた、子ども同士のトラブルに関する情報をもとに、実習においてどのように子ども同士のトラブルに対応しているのか調べた^{11) 12)}。その結果、実習初期においては、対応がうまくいかず担当保育士が駆けつけたり、学生自身が担当保育士に対応をお願いしたりする事例が多かったが、どの実習においても、学生は自分で解決し、その対応が正しいかどうかを確認し、解決方法の習得を目指していると考えられる。また、対応で困っていることは、仲裁の際に納得できるように説明することであった^{11) 12)}。

しかし、筆者らの研究では、エピソード記録を基に実習の不安を読み解き、保育内容「人間関係」に関わる内容では、「子ども同士のトラブルの対応」が多かったため、「子ども同士のトラブルの対応」に焦点を当ててきた。しかし、保育内容「人間関係」で取り扱う内容は、子ども同士のトラブルだけではなく、保育者と子ども、保育者同士、保育者と保護者など様々であり、講義内でもさまざまな人間関係について取り扱っている。そこで、学生の現状等を踏まえながら、実習への不安を明確化し、講義の学びが不安の解消や実習

での実践へ、また実習の課題や学びを講義につなげる必要があると考える。

II. 目的

本研究では、①実習経験を経ることによって実習前の不安、実習中の困りについて明らかにする、②実習経験を経ることによって保育内容「人間関係」にかかわる様々な人間関係について実習前の不安と実習中の困りについて明らかにする、③実習前の不安や実習中の困りをもとに、実習指導と科目間の連携や、実習の学びを講義で生かす方法について、保育内容「人間関係」の講義を中心に検討する。

III. 方法

対象者は、短期大学にて保育士資格を取得する学生94名で下記の日程で、調査の趣旨に賛同し以下の人数が調査に答えた。

1回目：保育実習Ⅰ（1年次の令和3年2～3月）4～5月に実施 回答者85名を分析

2回目：保育実習Ⅱ（2年次の令和3年8～9月）10月に実施 回答者59名を分析

なお、1回目に実施した実習の不安は、矢野・安東（2021）で結果を示している。「人間関係」にかかわる内容については、安東・矢野（2019）をもとに、子ども同士のトラブル以外の項目を入れ実施した。アンケート内容について表1に示す。

表1 アンケート内容

I 実習の不安や困りに関する調査（1年次・2年次の保育実習で実施）	II 人間関係に関する調査（1年次・2年次の保育実習で実施）
①実習に行く不安は何ですか	①実習で対応に困った人間関係は何ですか
ア：実習全般	ア：保育者と実習生（自分）
イ：気になる子どもの対応	イ：保育者同士
ウ：子ども同士の人間関係やトラブルへの対応	ウ：実習生同士（他大学の学生も含む）
エ：実習先の保育者との人間関係	エ：保育者と子ども
オ：主な活動の部分実習の内容や実施	オ：実習生と子ども
カ：手遊び・絵本読み	カ：子ども同士（トラブルや人間関係の形成）
キ：日誌の書き方・メモの取り方	キ：その他
ク：指導案の書き方	②子ども同士のトラブルに遭遇しましたか
ケ：安全管理について	はい/いいえ
コ：発達に即した援助の仕方について	③子ども同士のトラブルの原因はどれですか
サ：その他	ア：物の取り合い（おもちゃなどの取り合いが原因）
② ①で挙げた不安のなかで行く前までに解決したものは何ですか。	イ：物の貸し借り（おもちゃなどを貸す貸さないが原因）
ア：実習全般	ウ：予期せぬ衝突（わざとではない行動が原因）
イ：気になる子どもの対応	エ：順番争い（競争の優劣や勝負の結果が原因）
ウ：子ども同士の人間関係やトラブルへの対応	オ：順番ぬかし（並んでいるときに前に割り込んだなどが原因）
エ：実習先の保育者との人間関係	カ：仲間外れ（遊びに入れる・入れないが原因）
オ：主な活動の部分実習の内容や実施	キ：友達の行動への注意（友達の行動を指摘したことが原因）
カ：手遊び・絵本読み	ク：遊びの内容（遊びの決定にすることが原因）
キ：日誌の書き方・メモの取り方	ケ：その他
ク：指導案の書き方	④子ども同士のトラブルにどのように対応しましたか
ケ：安全管理について	ア：トラブルの仲裁をした
コ：発達に即した援助の仕方について	イ：保育者に知らせ解決してもらった。
サ：その他	ウ：どうしたらよいかわからず何も対応ができなかった。
③ ②で挙げた解決できたものは、どうやって解決しましたか。	オ：その他
ア：授業で取り扱われた	⑥トラブルの仲裁をしたときの状況であってはまるものは何ですか
イ：実習の事前指導	ア：解決できた。
ウ：先輩や友達からの情報	イ：仲裁したが解決できなかった。後で保育者に相談した。
エ：事前訪問での説明	ウ：仲裁したが解決できなかった。保育者には相談しなかった。
オ：大学の実習担当教員への相談	⑦ ⑥で解決できなかった人は、解決できなかった理由は何です
④ 実習をとおして困ったことを選択または記入してください。	ア：泣いたり、パニックになったりしていたため落ち着かせることができなかった。
ア：気になる子どもへの対応	イ：子どもが納得できるように説得ができなかった。
イ：子ども同士の人間関係やトラブルへの対応	ウ：解決の方法がわからず戸惑ってしまった。
ウ：実習先の保育者との人間関係	エ：解決方法はわかっていたが、行動が伴わなかった。
エ：主な活動の部分実習の内容や実施	オ：トラブルの原因を聞き出すがよくわからなかった。
カ：手遊び・絵本読み	カ：子ども同士の人間関係ができあがっており、介入できなかった。
キ：日誌の書き方・メモの取り方	キ：保育者と同じ対応をしたが聞いてもらえなかった。
ク：指導案の書き方	ク：その他
ケ：安全管理について	⑧ 保育内容「人間関係」の授業内容で役に立った・今後役に立ちそうな内容について具体的に記入してください。
コ：発達に即した援助の仕方について	⑨ 保育内容「人間関係」の授業内容でまだ知りたいことについて具体的に記入してください。
サ：その他	
⑤ ④で挙げた内容で実習中に解決できたものは何ですか	
ア：気になる子ども・利用者への対応	
イ：子ども同士や利用者同士の人間関係やトラブルへの対応	
ウ：実習先の保育者との人間関係	
エ：主な活動の部分実習の内容や実施	
オ：手遊び・絵本読み	
カ：日誌の書き方・メモの取り方	
キ：指導案の書き方	
ク：安全管理について	
ケ：発達に即した援助の仕方について	
コ：その他	

IV. 結果と考察

1年次の保育実習終了後のデータ(矢野・安東2021)と比較した。また、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を受け、2年次の実習が保育実習Ⅱ(10日間)のみの学生と保育実習Ⅰ・Ⅱ(20日間)連続で実施した学生もいたため、実習経験や実習期間ごとの比較も行った。

1. 保育実習にかかわる不安や困りについて

①実習前の不安について

実習前の不安に関して表2に示す。

表2 実習前の不安について

	1年次 n=85	2年次		
		全体 n=59	保育実習Ⅱのみ n=39	保育実習Ⅰ・Ⅱ n=16
実習全般	70.6%	27.1%	25.6%	25.0%
気になる子どもへの対応	38.8%	44.1%	41.0%	43.8%
子ども同士の人間関係やトラブルへの対応	49.4%	33.9%	30.8%	37.5%
実習先の保育者との人間関係	60.0%	50.8%	46.2%	62.5%
主な活動の部分実習の内容や実施	50.6%	59.3%	71.8%	31.3%
手遊び・絵本読み	63.5%	39.0%	33.3%	37.5%
指導案の書き方	50.6%	50.8%	59.0%	31.3%
安全管理について	25.9%	20.3%	15.4%	31.3%
発達に即した援助の仕方について	43.5%	39.0%	35.9%	43.8%
日誌の書き方・メモの取り方	75.3%	23.7%	15.4%	50.0%
その他	—	1.7%	2.6%	—

実習前に行く前の不安に関して、1年次は、いずれの項目も不安が高い傾向にあった。2年次は、1年次と比較すると「気になる子どもの対応」、「主な活動の部分実習の内容や実施」を除いては、いずれの項目も不安が減少、または減少傾向にあった。特に「実習全般」が、1年次が70.6%に対して、2年次は、27.1%、「日誌の書き方・メモの取り方」は、1年次は75.3%、2年次は23.7%と大幅に減少している。また、1年次、特に高い不安は、「日誌の書き方・メモの取り方」75.3%、「実習全般」70.6%、「手遊び・絵本読み」63.5%、「実習先の保育者との人間関係」60.0%であった。2年次は、「主な活動の部分実習の内容や実施」59.3%、「実習先の保育者との人間関係」、「指導案の書き方」が50.8%と高めであった。

これらの結果は、1年次は、初めて書く日誌、手遊び・絵本読みの実施について、2年次は査定保育に関わる「主な活動の部分実習の内容や実施」「指導案」の不安が高いことを示し、1年次と2年次の実習内容の違いやその特徴に沿って不安が高まることが明らかとなった。また、2年次には「実習全般」が大幅に減少していることから漠然とした不安は軽減し、実際の経験による具体的な不安や困りへと変化していることが明らかとなった。

次に実習経験や期間から保育実習Ⅱのみの学生と保育実習Ⅰ・Ⅱを連続で実施した学生で比較する。保育実習Ⅱのみの学生は「主な活動の部分実習の内容や実施」が71.8%、「指導案の書き方」59.0%、ついで「実習先の保育者との人間関係」46.2%、「気になる子どもへの対応」41.0%であった。それに対して、保育実習Ⅰ・Ⅱを連続で実施した学生は、「実習先の保育者との人間関係」62.5%、「日誌の書き方・メモの取り方」50.0%、次いで「気になる子どもへの対応」、「発達に即した援助の仕方について」43.8%であった。これらの結果から、保育実習Ⅱのみの学生は、査定保育に関することや、子どもへの対応で難しい「気になる子どもへの対応」など、不安に感じている内容が絞られているが、保育実習の経験がない学生は、1年次ほど漠然とした不安はないものの、いずれの項目も一定程度、不安に感じており、特に「日誌の書き方・メモの取り方」は、保育実習Ⅱのみの学生と比較すると高い。実習経験を積み重ねることで、不安な内容が明確化されていくことがわかった。

保育内容「人間関係」にかかわるところとして、「実習先の保育者との人間関係」「子ども同士の人間関係やトラブルの対応」については、2年次の方がわずかに減少している。また、実習経験や期間からの比較では、保育実習Ⅰ・Ⅱの学生の方が「実習先の保育者との不安」が高く、「子ども同士の人間関係やトラブルへの対応」についても高い傾向にある。

②実習に行くまでに解決した不安と解決した理由

実習に行くまでに解決した不安について表3に、また解決した理由を表4に示す。

表3 実習に行くまでに解決した不安について

	1年次 n=85	2年次		
		全体 n=59	保育実習 IIのみ n=39	保育実習 I・II n=16
実習全般	5.9%	1.7%	2.6%	—
気になる子どもへの対応	12.9%	6.8%	5.1%	12.5%
子ども同士の人間関係やトラブルへの対応	10.6%	16.9%	20.5%	12.5%
実習先の保育者との人間関係	7.1%	13.6%	10.3%	25.0%
主な活動の部分実習の内容や実施	10.6%	8.5%	10.3%	6.3%
手遊び・絵本読み	31.8%	20.3%	17.9%	25.0%
指導案の書き方	22.4%	20.3%	23.1%	18.8%
安全管理について	12.9%	16.9%	17.9%	18.8%
発達に即した援助の仕方について	8.2%	8.5%	10.3%	6.3%
日誌の書き方・メモの取り方	30.6%	20.3%	17.9%	25.0%
その他	3.5%	—	—	—

表4 不安が解決した理由について

	1年次 n=85	2年次		
		全体 n=59	保育実習 IIのみ n=39	保育実習 I・II n=16
授業で取り扱われた	45.9%	35.6%	33.3%	50.0%
実習の事前指導	32.9%	23.7%	17.9%	37.5%
先輩や友達からの情報	18.8%	20.3%	15.4%	37.5%
事前訪問での説明	15.3%	32.2%	33.3%	31.3%
大学の実習担当教員への相談	11.8%	6.8%	5.1%	12.5%
その他	3.5%	8.5%	7.7%	12.5%

実習に行くまでに、解決した不安について、1年次では、「手遊び・絵本読み」31.8%、「日誌の書き方・メモ取り方」30.6%、「指導案の書き方」22.4%であった。2年次では、「手遊び・絵本読み」、「指導案の書き方」、「日誌の書き方・メモの取り方」がいずれも20.3%であった。次に実習経験や期間から保育実習IIのみの学生と保育実習I・IIを連続で実施した学生を比較した。保育実習IIのみの学生は、「指導案の書き方」23.1%、「子ども同士の人間関係やトラブルへの対応」20.5%であった。保育実習I・II連続の学生は、「実習先の保育者との人間関係」、「手遊び・絵本読み」、「日誌の書き方・メモの取り方」が25.0%であった。以上の結果から、実習に行くまでには、不安がなかなか解決していないことが明らかであるが、実習内容の関連する項目が上位に挙がっていることから不安に即した内容を取り入れることで解消できる可能性が示唆されている。特に保育実習IIのみの学生では、「子ども同士の人間関係やトラブルの対応」も項目に挙がっていることから、講義の中での内容や指導方法を工夫するとさらなる効果は期待できると考えられる。

実習に行くまでに不安が解決した理由としては、1年次では、「授業で取り扱われた」45.9%、「実習事前訪問」32.9%であった。2年次では、1年次よりばらつきがあり、「授業で取り扱われた」35.6%、「事前訪問での説明」32.2%、「実習の事前指導」23.7%であった。2年次における実習経験や期間の違いに比較では、保育実習IIのみの学生では、「授業で取り扱われた」、「事前訪問での説明」が33.3%であった。それに対して、保育所実習I・IIを連続で実施した学生では、「授業で取り扱われた」50.0%、「実習の事前指導」、「先輩や友達からの情報」が37.5%、「事前訪問での説明」が31.3%でばらつきがあった。これらの結果から、1年次においては、「授業で取り扱われた」、「実習の事前指導」が高いことから、1年次の開講科目、講義内容の検討、実習の事前指導の指導内容を工夫すれば学生の不安は軽減できるのではないかと考えられる。2年次においては、「授業で取り扱われた」について、「事前訪問での説明」がきており、打ち合わせで実習の見通しを持つことで不安が軽減されることが明らかとなった。このことから、事前訪問での打ち合わせ内容を不安に沿って、具体的な内容を打ち合わせられるように明確化して指導を行えば、さらなる不安軽減につながる可能性がある。また、1年次に保育実習の経験がない保育実習I・II連続実施の学生においては、「先輩や友達から」の情報の割合も高い。このことから、1年次においては、異年齢交流をい

れることも不安軽減の一助になると考えられるし、保育実習Ⅰの事後指導内で情報共有の場を設けることで、互いの不安も軽減できると思われる。

保育内容「人間関係」に関連する項目、「子ども同士の間関係やトラブルの対応」については、1年次10.6%、2年次16.9%でいずれも実習前に解決はできていない可能性が高い。「実習先の保育者との人間関係」については、1年次は、7.1%、2年次は13.6%でこちらも実習前に解決できない可能性が高く、2年次の方が少し上昇していることから、実習経験に伴い保育者との関係に何らかの困難さを感じている学生もいると考えられる。実習経験や実習期間の違いでは「子ども同士の間関係やトラブルの対応」が、保育所実習Ⅱのみの学生は20.5%、保育所実習Ⅰ・Ⅱ連続の学生は12.5%で実習経験による差が見られる。また、「実習先の保育者との人間関係」についても、実習経験や実習期間による違いで差が見られ、保育所実習Ⅱのみの学生は、10.3%、保育実習Ⅰ・Ⅱの学生は、25.0%であった。以上の結果から、「子ども同士の間関係やトラブルの対応」、「実習先に保育者との人間関係」は実習前に解決することは難しいことが明らかになった。

③実習中の困りと実習中に解決したこと

実習を通して困ったことについて表5に示す。

表5 実習を通して困ったことについて

	1年次 n=85	2年次		
		全体 n=59	保育実習Ⅱのみ n=39	保育実習Ⅰ・Ⅱ n=16
気になる子どもへの対応	34.1%	32.2%	28.2%	50.0%
子ども同士の間関係やトラブルへの対応	45.9%	33.9%	28.2%	50.0%
実習先の保育者との人間関係	23.5%	10.2%	12.8%	6.3%
主な活動の部分実習の内容や実施	18.8%	33.9%	38.5%	31.3%
手遊び・絵本読み	30.6%	23.7%	25.6%	25.0%
指導案の書き方	8.2%	16.9%	20.5%	12.5%
安全管理について	9.4%	8.5%	12.8%	—
発達に即した援助の仕方について	31.8%	28.8%	33.3%	25.0%
日誌の書き方・メモの取り方	41.2%	16.9%	17.9%	18.8%
その他	3.5%	1.7%	2.6%	—

1年次は、「子ども同士の間関係やトラブルへの対応」45.9%、「日誌の書き方・メモの取り方」41.2%、「気になる子どもへの対応」34.1%、「発達に即した援助の仕方について」31.8%、「手遊び・絵本読み」30.6%であった。2年次では、「子ども同士の間関係やトラブルへの対応」「主な活動の部分実習の内容や実施」33.9%、「気になる子どもへの対応」32.2%、「発達を即した援助の仕方について」28.8%であった。次に、実習経験や期間での比較を行ったところ、違いが見られた。保育実習Ⅱのみの学生は、「主な活動の部分実習の内容や実施」38.5%、「発達を即した援助の仕方について」33.3%、「気になる子どもへの対応」、「子ども同士の間関係やトラブルへの対応」28.2%であった。それに対して保育実習Ⅰ・Ⅱを連続で実施した学生は、「気になる子どもへの対応」、「子ども同士の間関係やトラブルへの対応」が50.0%、「主な活動の部分実習の内容や実施」31.3%、「発達に即した援助の仕方について」、「手遊び・絵本読み」25.0%であった。

表6 実習中に解決した困りについて

	1年次 n=85	2年次		
		全体 n=59	保育実習Ⅱのみ n=39	保育実習Ⅰ・Ⅱ n=16
気になる子どもへの対応	21.2%	15.3%	15.4%	15.4%
子ども同士の間関係やトラブルへの対応	21.2%	20.3%	23.1%	23.1%
実習先の保育者との人間関係	1.2%	1.7%	5.1%	5.1%
主な活動の部分実習の内容や実施	7.1%	13.6%	20.5%	20.5%
手遊び・絵本読み	11.8%	8.5%	17.9%	17.9%
指導案の書き方	3.5%	3.4%	15.4%	15.4%
安全管理について	3.5%	3.4%	10.3%	10.3%
発達に即した援助の仕方について	14.1%	—	7.7%	7.7%
日誌の書き方・メモの取り方	20.0%	10.2%	7.7%	7.7%
その他	2.4%	1.7%	2.6%	—

実習中に解決した困りについては、いずれの学年も割合は低い傾向にあり、1年次は「気になる子どもへの対応」、「子ども同士の間関係やトラブルへの対応」21.2%、「日誌の書き方・メモの取り方」20.0%であった。2年次は、「子ども同士の間関係やトラブルへの対応」20.3%であった。

保育内容「人間関係」に関連する項目、「子ども同士の間関係やトラブルへの対応」について、1年次は実習を通しての困りは高く、実習中に解決した割合は低い。それに対して、2年次は1年次よりも困りは低い傾向にあるが、他の項目よりは高い。そして実習中の解決についても1年次と変わらない。次に、「実習先の保育者との人間関係」については、1年次の方が高く、2年次の方が低かった。また、実習中に解決した割合は低く、実習先の保育者との関係を築いたり、修復したりすることは難しい。

以上の結果から、1年次は、実習前の不安でも拳がっていた「日誌の書き方・メモの取り方」が高く、実習期間中の困りとして大きなウエイトを占めている。ただ2年次には減少しているため、実習中の日誌の指導や実習経験を積み重ねにより、困りは解消されていくと考えられる。2年次は、「主な活動の部分実習」への困りが高い。特に保育実習Ⅱのみの学生は、その傾向が強くと変わりがない。また、1年次・2年次に共通して、実習内容の特徴を除くと「子ども同士の間関係やトラブル」「気になる子ども」「発達に即した援助」で、子どもへの対応がほとんどで、実習でしか体験できないことであるとともに、個人の特徴によって関わり方が変わることから、実習前の不安も実習中の困りも解決ができていないことも多いと考えられる。

2. 保育内容「人間関係」に関わる困りについて

保育内容「人間関係」に関わる内容については、1年次は、矢野・安東（2021）と同時に調査を行い、2年次の保育実習終了後に同様の内容で調査し、比較検討を行った。実習の不安と困りと同様に、実習経験や実習期間の影響をみるため、保育実習Ⅱのみを実施した学生と保育実習Ⅰ・Ⅱ連続で実施した学生の比較も行った。

①実習で対応に困った人間関係について

実習にかかわる人間関係の困りについて表7に示す。

表7 実習に関わる人間関係の困りについて

	1年次 n=85	2年次		
		全体 n=59	保育実習Ⅱのみ n=39	保育実習Ⅰ・Ⅱ n=16
保育者と実習生(自分)	23.5%	18.6%	20.5%	18.8%
保育者同士	4.7%	18.6%	7.7%	12.5%
実習生同士(他大学の学生も含む)	3.5%	8.5%	—	6.3%
保育者と子ども	7.1%	1.7%	2.6%	12.5%
実習生と子ども	23.5%	5.1%	20.5%	25.0%
子ども同士(トラブルや人間関係の形成)	44.7%	22.0%	43.6%	25.0%
その他	2.4%	4.8%	2.5%	6.3%

1年次は、「子ども同士（トラブルや人間関係形成）」が44.7%、「保育者と実習生」、「実習生と子ども」が23.5%で、「子ども同士（トラブルや人間関係）」の困りが他の項目に比べて高かった。「子ども同士（トラブルや人間関係形成）」に関しては、実習前の不安から高く、実習前にも解決できていない項目であった。また、実習中の困りの中でも高かった。2年次は、「子ども同士（トラブルや人間関係形成）」が22.0%、「保育者と実習生」、「保育者同士」が18.6%であった。「子ども同士（トラブルや人間関係形成）」、「実習生と子ども」については、1年次より2年次の方が低くなった。2年次に低くなった理由としては、実習経験によるものと、保育内容「人間関係」の開講期が2年次前期であることも関係していると考えられる。

実習経験や実習期間の比較では、保育実習Ⅱのみの学生と保育実習Ⅰ・Ⅱを実施した学生では、違いがみられ、保育実習Ⅰ・Ⅱの学生の方がどの項目にも困りが見られる。その一方で保育実習Ⅱのみの学生は、「子ども同士（トラブルや人間関係形成）」が43.6%と保育実習Ⅰ・Ⅱ連続の学生に比べて高かった。「子ども同士（トラブルや人間関係形成）」については、実習期間が長い方が子どもとの関係が築けることが関わっていると考えられる。

②子ども同士のトラブルの遭遇率とその原因について

子ども同士のトラブルの対応については、学生の不安も高く、対応に困ることからどのぐらい遭遇しているのかについて調査を行った。

「子ども同士のトラブル」に関しては、1年次、2年次ともに遭遇している割合が高い。特に2年次は93.2%で保育実習Ⅰ・Ⅱ連続20日間の実習をおこなった学生は100%であった。

子ども同士のトラブルの原因については、表8に示す。その結果、1年次・2年次であまり変化は見られない。

表8 子ども同士のトラブルの原因

項目	1年次	2年次		
		全体 n=59	保育実習 Ⅱのみ n=39	保育実習 Ⅰ・Ⅱ n=16
物の取り合い(おもちゃなどの取り合いが原因)	80.0%	85.5%	89.2%	81.3%
物の貸し借り(おもちゃなどを貸す貸さないが原因)	61.7%	50.9%	56.8%	43.8%
予期せぬ衝突(わざとではない行動が原因)	13.3%	25.5%	21.6%	25.0%
順番争い(競争の優劣や勝負の結果が原因)	13.3%	23.6%	27.0%	18.8%
順番ぬかし(並んでいるときに前に割り込んだなどが原因)	16.7%	10.9%	8.1%	18.8%
仲間外れ(遊びに入れる・入れないが原因)	26.7%	30.9%	27.0%	43.8%
友達の行動への注意(友達の行動等を指摘したことが原因)	28.3%	8.6%	7.7%	12.5%
遊びの内容(遊びの決定に関することが原因)	26.7%	16.4%	13.5%	25.0%
その他	5.0%	1.7%	2.5%	—

③子ども同士のトラブルについての対応状況について

トラブルの解決について表9に示す。

「トラブルの仲裁をした」は、1年次80.0%、2年次81.8%とほとんど変わらない。「保育者に解決してもらった」については、1年次45.0%、2年次9.1%で2年次には減っていた。また、「どうしたらよいかわからず何も対応ができなかった」は、1年次は16.7%、2年次は1.8%と減少した。

表9 トラブルの対応状況について

	1年次	2年次		
		全体 n=59	保育実習 Ⅱのみ n=39	保育実習 Ⅰ・Ⅱ n=16
トラブルの仲裁をした	80.0%	81.8%	89.2%	75.0%
保育者に知らせ解決してもらった	45.0%	9.1%	5.4%	6.3%
どうしたらよいかわからず何も対応ができなかった	16.7%	1.8%	2.7%	—
その他	5.0%	7.3%	5.1%	12.5%

トラブルの仲裁の状況については表10に示す。

表10 トラブルの仲裁の状況について

	1年次	2年次		
		全体 n=59	保育実習 Ⅱのみ n=39	保育実習 Ⅰ・Ⅱ n=16
解決できた	45.0%	61.8%	64.9%	56.3%
仲裁したが解決できなかった。 後で保育者に相談した。	35.0%	25.5%	21.6%	37.5%
仲裁したが解決できなかった。 保育者には相談しなかった。	3.3%	—	—	—
その他	6.7%	3.4%	5.1%	—

「解決できた」が、1年次45.0%、2年次61.8%、「解決できなかった。後で保育者に相談した」が、1年次35.0%、2年次25.5%、「解決できなかった。後で保育者に相談しなかった」が1年次3.3%、2年次0%であった。また、2年次に保育実習Ⅱのみの学生と保育実習Ⅰ・Ⅱ連続実施の学生で比較したところ、保育実習Ⅱのみの学生では「解決できた」が64.9%、「解決できなかった。後で保育者に相談した」21.6%、保育実習Ⅰ・Ⅱでは、「解決できた」が56.3%、「解決できなかった。後で保育者に相談した」が37.5%であった。以上のことから実習の長短ではなく、実習で対応の困難さを経験し講義で学んだ方が対応しやすい可能性があると考えられ、短期大学の場合、2年次の前期開講が良いだろう。

次に、解決できなかった理由を表11で示す。

1年次は、「子どもが納得できるように説得できなかった」が63.0%、「泣いたり、パニックになったりしていたため落ち着かせることができなかった」、「解決の方法がわからず戸惑ってしまった」が51.9%であった。2年次は、「子どもが納得できるように説得できなかった」が80.0%と1年次より上昇したものの、「泣いたり、パニックになったりしていたため落ち着かせることができなかった」20.0%、「解決の方法がわからず戸惑ってしまった」25.0%で、1年次より減少した。

表11 トラブルが解決できなかった理由について

	1年次	2年次		
		全体 n=59	保育実習 Ⅱのみ n=39	保育実習 Ⅰ・Ⅱ n=16
泣いたり、パニックになったりしていたため落ち着かせることができなかった。	51.9%	20.0%	30.0%	10.0%
子どもが納得できるように説得できなかった。	63.0%	80.0%	90.0%	70.0%
解決の方法がわからず戸惑ってしまった。	51.9%	25.0%	30.0%	20.0%
解決方法はわかっていたが、行動が伴わなかった。	14.8%	15.0%	10.0%	20.0%
トラブルの原因を聞き出すがよくわからなかった。	29.6%	10.0%	—	20.0%
子ども同士の人間関係ができあがっており、介入できなかった。	11.1%	5.0%	10.0%	—
保育者と同じ対応をしたが聞いてもらえなかった。	14.8%	10.0%	20.0%	—
その他	3.7%	20.0%	2.5%	—

次に実習経験による違いについてみた。保育所実習Ⅱのみの学生では、「子どもが納得できるように説得ができなかった」90.0%、「泣いたり、パニックになったりしていたため落ち着かせることができなかった」、「解決の方法がわからず戸惑ってしまった」が30.0%であった。それに対して保育実習Ⅰ・Ⅱの学生は、「子どもに納得できるように説得できなかった」70.0%、「解決の方法がわからず戸惑ってしまった」、「解決の方法はわかっていたが、行動が伴わなかった」、「トラブルの原因を聞きだすがよくわからなかった」が20.0%、「泣いたり、パニックになったりしていたため落ち着かせることができなかった」が10.0%、「子ども同士の人間関係ができあがっており、介入できなかった」、「保育者との同じ対応をしたが聞いてもらえなかった」は0.0%と実習経験や実習期間で差が見られた。このことからトラブルの解決には、長期に関わり、子どもとの関係性がある方が解決しやすいと考えられる。

V. まとめと今後の課題

本研究では、①実習経験を経ることによって実習前の不安、実習中の困りについて明らかにする、②実習経験を経ることによって保育内容「人間関係」にかかわる様々な人間関係について実習前の不安と実習中の困りについて明らかにする、③実習前の不安や実習中の困りをもとに、実習指導と科目間の連携や、実習の学びを講義で生かす方法について、保育内容「人間関係」の講義を中心に検討することを目的に行った。

まず、第1の実習経験を経ることによって、実習前の不安、実習中の困りについては、実習経験のない1年生は、漠然とした不安を抱えており、2年次になり実習経験を経ることで不安が明確化していく。不安の傾向としては、実習内容の特徴が反映されており、1年次は「日誌の書き方・メモの取り方」「手遊び・絵本読み」、2年次では、「主な活動の部分実習」「指導案」が挙がり保育技術に不安を感じ、ついで1年次、2年次ともに「子ども同士の人間関係やトラブル」や「気になる子ども」などの子どもにかかわる内容に不安を感じていることが明らかとなった。保育者養成教育の実習前の不安に関する研究を行っている中原(2019)

では、実習前の不安で保育活動に直接関係する保育技術について不安を抱えていることが示されており、他の先行研究で示されたコミュニケーションや人間関係にかかわるような不安はあまり見られなかったと示されている¹³⁾。本研究においても保育技術の方が高いことが示されている。しかし、実習が始まると、実習内容に関わる保育技術以上に、子どもに関わることの困りが台頭し、困りが実習中に解消される割合は、不安と同様に低い。また、実習前・実習中と状況によって不安や困りが変化し、子どもへの対応は実習前・実習中関係なく解決も難しいことを踏まえ、不安・困り解消するような講義展開を考えていかなければならない。

次に、保育内容「人間関係」に関わる場所では、実習前は特に、子どもたちとのかかわり以上に「実習先での保育者との関係」に不安を抱いている。また、実習前の事前訪問や実習中での関わりで不安が解消できるわけではない。今後、保育者との関係でどんなことに不安や困りを感じているかは調査をしていく必要があるが、学生のエピソードの中には、発達の流れをつかむために、日ごとに実習するクラスが変わる場合には、担当する保育者によって、子どもへの関りや環境構成の方法が異なり指示が違ったり、実習生への具体的な指示がないことによって行動に迷いが生じ、判断が遅れ指導を受けたりするような事例が複数あった。また、保育者によって話しやすさ、話しにくさがあり、指示が変わったり、口調が強かったり、業務が忙しそうだと学生が判断するとコミュニケーションがとりにくいことが伺えた。さらに、エピソードの中には、「自分が悪いが・・・」、「自分の判断ミスであるが・・・」、「気が回らなかった」など自分の実習評価に関わったり、失敗につながったりすることや、保育者の否定につながることを懸念してかエピソードが詳細に書かれていなかったり、曖昧な表現で書かれていたり、エピソードが未回答なこともあった。新人保育者の早期離職に関する研究の多くは、その理由として、人間関係を挙げており、学生が保育者との関係においてどんなことに困難さを感じているのかを明らかにすることは、早期離職を阻止する一助になりうると考える。

最後に、実習指導や科目間連携に関しては、実習前の不安が実習内容の関わる実技に関することへの不安が高く、子どもに関わる、「気になる子どもへの対応」「子ども同士の間関係はトラブルへの対応」は実習前も実習中も変わらないことから、不安や困りは比較的高いまま実習を経ても解決できないところがあるだろう。「子ども同士の間関係やトラブルへの対応」については、保育内容「人間関係」が2年次の前期に開講されていたため、2年次の実習では、減少傾向が見られていた。特に、保育実習Ⅱのみの学生が低かったことから、実習で対応を経験して講義を受けることで、自分の対応を振り返り、エピソードから想像しやすい状況で講義を受ける方が効果は高いと思われる。実際、講義の中では、子ども同士の間関係やトラブルの対応について動画を用いて、保育者のトラブルの対応について自分の考えをまとめ、解説を行った。この講義の回が役に立ったと答えている学生が42名回答したうち14名いた。また、さらに子ども同士の間関係やトラブルの対応について学びたいという声もあった。また、今年度は実習のエピソード記録の活用ができなかったが、エピソードをもとに解説を受けたいという声もあった。以上のことから、学生の不安や困りをもとに実習や実習指導を中心として、どの科目でどこまで身につけるのか、また内容をどのようにつなげるのか教員間で情報を共有しなければ、学生に生きた教育は行えないと考える。例えば、「子ども同士の間関係やトラブルの対応」については、そのトラブルに「気になる子ども」がおり、難しい対応を求められた事例もある。このような場合、「障害児保育」との連携も必要になってくるため、科目間連携を図ることによって、学生の不安や困りは解消しやすくなるだろう。

今後は、これらの結果を踏まえ、保育内容「人間関係」のシラバスに、指導法に関わる実技、様々な人間関係の取扱いとその対応、「気になる子ども」の間関係から「障害児保育」との科目間連携、実習の学びの活用としてエピソード記録の活用を盛りこみ、講義の実施とその効果について検討を行っていきたい。

IV. 引用・参考文献

- 1) 河内晴美、小島玲子、「教育・保育者を目指す大学生の間関係に関する意識：支援者としての学びを通して」、日本教育心理学会総会発表論文集 57 (0) (2015) 109-113
- 2) 加藤由美、安藤美華代、「大学生の間関係力育成に関する研究の動向と保育者養成教育への活用に向けて」、岡山大学教師教育開発センター紀要 9 別冊 (2019) 337-350
- 3) 佐藤達全、「大人になれない保育科学生の指導について—保育実習を通じて気づいた問題点と対応—」

- 育英短期大学研究紀要 37 (2020) 61-72
- 4) 館山壮一、千葉正、「保育士を目指す学生が抱える課題と変化について—テキストマイニングによる研究の整理と展望—」、修紅短期大学紀要 39 (2019) 35-49
 - 5) 安東綾子、矢野洋子、「保育士養成の短期大学における実習に向けての初年次教育の取り組み—学生履修状況を踏まえたカリキュラムの構築と学科・科目間連携—」、九州女子大学紀要 58-1 (2021) 63-74
 - 6) 安東綾子、矢野洋子、「保育内容「人間関係」に関わる学生の実習経験とその内容分析—保育所実習と教育実習(幼稚園)子ども同士の人間関係のエピソード分析—」、九州女子大学 学術情報センター 研究紀要 1 (2018) 133-147
 - 7) 「保育所保育指針」平成30年度改訂版
 - 8) 「幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究」文部科学省 報告書「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える 24
 - 9) 工藤秀美、「「人間関係」領域における保育構想力の育成に関する一考察・幼稚園実習の振り返りと指導計画作成の授業を通して」生涯発達研究 9 (2016) 109-113
 - 10) 安東綾子、矢野洋子、「保育内容「人間関係」に関わる学生の実習経験とその内容分析Ⅱ—学生の子ども同士のトラブルの解決に着目して—」、九州女子大学 学術情報センター 研究紀要 2 (2019) 121-130
 - 11) 矢野洋子、安東綾子、「学生の保育実習への不安に関する検討Ⅰ—保育実習を通してどのように変化するのか—」、九州女子大学紀要 58-1 (2021) 75-85
 - 12) 中原大輔、「保育者養成教育における実習前不安に関する一考察」、福祉健康科学研究 14 (2019) 65-75

A Study of Students' Anxiety about “Child Care Practical Training” II

Ayako ANDO, Yoko YANO

Department of Childhood Care and Education, Kyushu Women's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

Abstract

In this study, we clarified the anxieties before and during the child care practical training, especially the anxieties and troubles related to the childcare program “Human Relations”, and examined the cooperation between the practical training guidance and the subjects, and how to reflect the learning from the child care practical training in the lectures, mainly in the lecture of “Human Relations”. As a result, the most common anxieties before the child care practical training are related to the childcare skills associated with the training content. However, there was no change in the content related to the care of children from before to during the child care practical training, and it was found that anxiety and trouble continued and were difficult to be resolved. In addition, they felt anxious and troublesome in the relationship with nursery school teachers or child care staffs, and were puzzled by the different teaching methods and responses of individual nursery school teachers or child care staffs. From the anxiety and troubles of students, it became very clear that it would be difficult to reflect the learning from the child care practical training in lectures without clarifying what contents would be taught in each subject, and also how the teaching contents would be linked in the various subjects. Thus, the following issues were addressed: lectures on “Human Relations” in the content of childcare, and practical skills related to teaching methods, handling various relationships and how to deal with them, and also needs of creating a syllabus with a view to linking human relations of “children with disabilities” and “Care for Children with Disabilities” between the subjects. Furthermore, utilization of episode records is important issue in order to reflect the learning from the practical training.

Keyword : Childcare practical training I ・ Childcare practical training II ・ Human Relations ・ Links between subjects